

アナログプレイヤーの比較試聴(36)

—モーツアルトを聴く(36)—

1. 始めに

前報(35)に引き続き、アナログプレイヤー3機種と比較試聴を実施していきます。

2. アナログプレイヤーの比較試聴方法

アナログプレイヤー3機種の試聴経路は、ThorensTD124とGrrad401の再生経路を変更した前報(18)と同様です。

音源は、モーツアルトのアナログ盤を使用していきますが、今回は宗教曲です。

ドイツグラモフォン MG 2299

モーツアルト レクイエム

カール・ベーム指揮ウイーンフィル

ドイツグラモフォン 138767

モーツアルト レクイエム

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

harmonia mundi HMM332292

モーツアルト レクイエム

レネ・ヤコブ指揮フライブルグバロックオーケストラ

今回も、各プレイヤーにターンテーブルアキュライザーTACU-1を使用していきます。また、LINN LP-12の再生系では、ダンパーフレークの導入(1)で報告したダンパーフレークを2ヶ所に適用しています。さらに、ダンパーフレークの導入(3)で報告したTruPhaseから300Bアンプに介在させたバランスアナログアキュライザーの出力側へのダンパーフレークを適用しています。

さらにダンパーフレークの導入(5)で報告したとおりThorensTD124とGrrad401のカートリッジシエルにもダンパーフレークを適用しています。

3. アナログプレイヤーの比較試聴結果

ドイツグラモフォンの2盤はTELDEC、逆相、第4時定数Highで、harmonia mundi盤はTELDEC、正相、第4時定数Highで聴いていきます。

ドイツグラモフォンのベーム盤では、ThorensTD124は、ベームらしいがっちりとした構成でソリストや合唱の定位もよく、予想以上に緻密な音で聴かせてくれます。

LINN LP-12は、ThorensTD124よりさらに合唱の分離がよく、ソリストの歌唱も明晰で、この曲の表情を遺憾なく発揮しています。

Grrad401 は、中庸で端正な表現で、合唱やソリストの歌唱のバランスもとれています。

ドイツグラモフォンのカラヤン盤では、ThorensTD124 は、混然一体となった押出の強い迫力ある演奏です。合唱の分離と定位はよくありませんが、ソリストの歌唱は伸び伸びとし、オーケストラも張りのある音です。

LINN LP-12 は、カラヤンらしいダイナミックな表現を 3 システムの中でももっとも細かいところまで描いています。ソリストの歌唱はクリアーに前にでてくるものの合唱の分離はそれほどよくありません、

Grrad401 は、カラヤンらしいダイナミックな表現を聴き取れるものの、合唱の分離や定位は甘く、多少演奏全体がぼやけた印象です。

harmonia mundi のフライブルグバロックオーケストラ盤では、ThorensTD124 は、最新のデジタル録音らしくクリアーな音で、細部の表現もよく、合唱の分離も上記 2 盤に比べれば改善されており、ソリストの歌唱も伸び伸びとしています。

LINN LP-12 は、最新のデジタル録音のきめ細かい表現が出ており、合唱の分離と定位もよく、ソリストの声の質感もバロックアンサンブルの古楽器の質感も十分に味わえます。

Grrad401 は、個々の歌唱や楽器の音より、全体としてバランスよく、豊かな響きが楽しめます。

以上、これまで計 36 回にわたってモーツアルトの作品を対象にアナログ 3 システムの比較試聴を行ってきました。この間、下記のような変更を加えてきました。

前報(18) ThorensTD124 と Grrad401 の再生経路を変更

前報(24) TACU-1 の導入

前報(26) LINN LP-12 にダンパーフレーク導入

前報(30) ThorensTD124 と Grrad401 にダンパーフレーク導入

これらの変更はどれも功を奏し、当初に比べれば 3 システムともそれぞれの特徴を活かす方向に改善されました。

3 システムのおおまかな特徴はあるのですが、盤によって好みの優劣が変わることがあり、限定された音源でシステムの優劣を評価したり、特定のシステムで音源の評価を行うリスクも感じられました。

4. まとめ

ThorensTD124 と Grrad401 の再生経路を変更した結果も、3 機種 3 様の再生パフォーマンスが確認できましたが、さらに、TACU-1 の導入やカートリッジのシェルへのダンパーフレークの適用効果もあって、このような大曲でも破綻なく、すべてにおいて、グレード上がってきている印象です。

以上